

「産業景観の諸相」

近畿大学理工学部 社会環境工学科
教授 岡田 昌彰 氏



1967年茨城県日立市生まれ。東京工業大学工学部土木工学科卒。同大学院博士後期課程修了、博士(工学)。その後、株式会社長大、国総研、東京大学研究員などを経て、2003年近畿大学理工学部社会環境工学科講師、2013年より現職。英国ケンブリッジ大学マクドナルド研究所客員研究員。著書(単著)に「テクノスケープ」(鹿島出版会:2003)、「日本の砦都」(創元社:2017/都市計画学会・観光研究学会・造園学会賞受賞)、「美しい英国の産業景観」(創元社:2018)がある。

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました近畿大学理工学部社会環境工学科の岡田昌彰と申します。よろしく願いいたします。私は土木工学の出身ですが、今は景観工学、土木史、加えて土木遺産、産業遺産を研究しております。今日は歴史ある関西道路研究会にお招きいただきまして、大変感謝しております。

産業景観(テクノスケープ:いわゆる人工物の景観)を、どのように価値づけられるについて長年研究していますので、今日はその概要をご紹介したいと思います。

◆産業景観

まず皆さんにお見せしたいのは、この写真です。静岡県富士市の田子の浦です。万葉集の「田子の浦ゆ うちいでて見れば 真白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける」の場所です。ここを通りかかったとき、いい感じで

雲がかかっていると思ってこの写真を撮りました。富士山と産業景観ですね。私は、これを勝手に「現代版の富嶽三十六景」の一つと呼んでいます。北斎が今も生きていたら恐らくこれを描くのではないかと思います。

富士市は、製紙工場など工場の多いまちです。これまでは、富士山の手前に工場の煙突が見えるのはいかかなものかというネガティブな価値観で景観政策が長らく進められてきました。ただ、ここ10年ぐらいで価値観がいきなり変わってきていて、このような「富士山と工場の景観」は、ある意味我がまちの個性、宝ではないかという見方でPRされています。たいへん面白い動きだと思っています。私は、日本経済新聞で連載記事を何回か執筆しています。令和2年5月には3回シリーズで連載「日本のテクノスケープ」を担当しました。その第1回目に富士市のこの産業景観について触れました。

富士市のほかに、水島工業地帯、東京の奥多摩についても写真とともに執筆しています。

次に、大分市青崎の大在という集落から見える工業地帯です。大分市は城下町のイメージが強いですが、実は大工業都市でもあります。このような景観は大阪の堺や高石、兵庫の尼崎にもありますが、大分の地元では「大在ディズニー」と呼ばれている。夜になると光り輝いて、ディズニーランドのような夜景が浮かび上がるわけです。かつては公害の対象としてのイメージが支配的でしたが、今はもっとポジティブに考えていこうという動きが出てきています。

これは王子マテリアの呉工場です。ここも臨海工業地帯で、ほかに製鉄、造船もあります。これは製紙工場です。プラントと、港から紙の材料である木材チップを積み入れて、そこで生産活動をしている。それが視覚的にとてもわかりやすい。

これも面白い事例です。青森県八戸市の大規模な石灰石の鉱山です。飛行機が三沢空港に着陸する直前に、進行方向左側に一瞬見えます。許可を得て鉱山の中に入れていただきましたが、かなり深いところまで掘られているのがわかります。露天掘りでどんどん掘っていくわけです。地元では、「八戸キャニオン」という名称で呼ばれています。2007年に初めてここに行ったときに、タクシーの運転手さんに「八戸キャニオンに行きたい」と申しあげたらすぐにわかっていただけました。八戸市内では、この名前がある程度人口に膾炙しているというか、定着しているのではないかと思います。ちなみにこのニックネームをつけられた方は、地元の郷土史家の江刺家均さんという方です。

八戸キャニオンがよく見える展望台があります。海拔マイナス 170m で、地表からは最深でマイナス 250m になりますので、実は日本で一番深いところです。八戸市役所の部局、八戸コンベンションビューローは散策マップで「日本一空から遠い場所」と表現しています。石灰石の採掘目的でできた空間がこのような独特の景観を生んでいます。次に、これはセメント工場によくある NSP キルンですが、八戸のものには面白い歴史があります。工業用水を得るために川沿いにありますので、引きが確保できて明快に見え、地域のランドマークになっています。周辺地域を歩くと、背後に NSP キルンのタワーが見える。これが八戸市の原風景の 1 つかと思います。実は原敬が、この工場の設立に関わっています。

工場の景観が好きな人たちはある意味マニアといわれていた人たちですが、SNS にこのような景観がどんどんアップされ、その価値観が急激に広がっています。今、工場が好きと言っても、君はマニアだねとはあまり言われなないかもしれません。それほど価値の領域が広がってきていると思います。役所も力を入れていて、八戸まちづくり文化推進室が「八戸工場アート」や生涯学習の勉強会「八戸工場大学」などをつくって、まち全体で盛り上げている。わがまちに何かあるのかをみんなで考えながら盛り上げていこうという、面白い事業が展開しています。

こういう動きは最近いろいろなところで見られ、私もお手伝いをしています。このときは私と吉岡宏高先生（当時札幌国際大学教授）が担当しました。吉岡先生は、私にとって産業遺産、産業景観分野の兄貴分みた

いな方で、いろいろなところで一緒に仕事をしていましたが、残念ながら一昨日亡くなられました。本当にショックでした。吉岡さんの遺志を継いで私もこれから頑張っていきたいと強く思っています。

次に、これは少し変わった景観です。石油採掘装置です。中東かどこかではなく、日本国内です。秋田県や新潟県では石油が採れます。ここは八橋油田のポンピングユニットです。1942年頃から採掘されているもので、現在も現役で稼働しています。遊園地の遊具という言いすぎかもしれませんが、面白く見てもらえるように意図されているのではないかとさえ思えてしまいます。地下に埋蔵されている原油を採っているものです。このように林立して、黙々と動いています。秋田の人にとっては当たり前の風景なのかもしれません。秋田大学の鉱業博物館に、廃止されたポンプユニットが産業遺産として展示されています。こういう思いがけない産業景観にも、私たちは出会うことがあります。

これは最近私が深く関わっている三重県の四日市です。四日市にもこのような港の風景があります。四日市の工業地帯には公害問題など複雑な現代史がありますが、現在、公害は以前に比べればかなり克服されていますし、市民が健康的に生活することができるまちになっている。むしろ産業景観を生かして四日市の個性として何かできないかということいろいろ模索されています。例えば伊勢湾側のまちを歩くと、工業高校の横に煙突が見えますし、まちの比較的中心のところでも背景には工場が見えるわけです。四日市の人たちはこの景観をどう思っているのか。面白い事例がありまし

た。例えば四日市下野小学校の校歌に、「科学の誇る工場」という歌詞が出てきます。公害問題が広がる前に作られたものですが、最近改訂されるまでは歌われて続けていた。誇るべきことではないかと思えます。

こちらの四日市南高校でも「フレアスタック」が校歌に歌われている。作詞は、日本を代表する詩人の谷川俊太郎さんです。谷川さんに作詞を依頼したプロセスは詳しく知りませんが、人々の心の中にこういう産業景観が深く染みついていることがうかがえる事例ではないかと思えます。

先月、四日市の商工会議所さん、日建設計さん、近畿大学の学生の企画で、**yokkaichi BAUR** ミーティングというイベントを実施し、たくさんの方に参加いただきました。

「まちづくりみなと協議会」を立ちあげて、港を回ってもらおうというプロジェクトを企画しています。いろいろ仕掛けをして、市民あるいは訪問者の方にこの産業景観、あるいは産業空間にふれてもらう取り組みです。今後も継続していくことになると思いますので、成果が出ましたら改めてご紹介したいと思います。

1980年代ぐらいからこういう工場夜景を撮るプロの写真家もいて、写真集も出版もされていました。今はデジカメ全盛でスマホでも撮れます。日本人1億人総カメラマンのような時代です。しかもSNSという発表の場もあります。ここは四日市の石原町という有名な工場夜景スポットで、私が行ったときも県外ナンバーの車が来ていましたね。皆さん黙々と工場の夜景を撮っていました。

四日市港ポートビルというタワーがあります。そこから見る工場夜景も有名です。夜

景を見せることを狙ったわけではないと思いますが、いつしかこういう景観が眺められる、あるいは写真の撮れる名スポットとして SNS などですでにどんどん広がっていき、今は人気のある場所になっています。

実際、私が行ったときも、若い方あるいはご年配の方も来られて、工場夜景を楽しんだり、写真を撮られたりしていました。ガラス越しに夜景を撮ろうとすると、蛍光灯の反射光が邪魔になって撮れなくなります。暗幕があると反射光が消えて夜景がうまく撮れます。ここでは受付で暗幕を貸し出しています。

これは 2011 年からの取り組みです。工場夜景ツアーとともに「全国工場夜景サミット」が開催されていて、私も何回か基調講演で呼んでいただいています。北九州から室蘭、川崎、四日市、それから尼崎と堺、高石なども最近加わりました。それから、東海、周南（徳山）、千葉、この辺の都市が集まって工場夜景で売り出そうとしているまちが、情報交換をする場です。毎年開かれています。

◆工場景観に価値を見出したのは 20 世紀初めの頃

工場景観を価値あるものとする考えは、今に始まったわけではなく、世界では 20 世紀初め、日本でも 20 世紀初めから半ばぐらいに始まります。これは、アルベルト・レンガー＝パッチュという、画家でもあり写真家でもあるドイツの作家が撮影した「溶鉱炉」という作品です。溶鉱炉の形の面白さを追求した。そういう芸術運動（新即物主義）を先導した人たちの一つの表現の材料として、工場が描かれていたわけです。

これは、日本の画家、牛島憲之の作品です。京浜工業地帯の景観をシュールに描いたものです。次は古賀春江の「海」という有名な絵です。彼は新しい時代の到来を、女性解放、空を飛ぶ気球、潜水艦（これわざわざ輪切りにしています）などのアイコンで表現しました。それからやはり工場です。新しい時代のアイコンの 1 つとしてテクノスケープ（産業景観）を捉えている。この頃は、新しい時代、もの珍しさ、あるいは成長、躍進のシンボルという考え方で産業景観が捉えられているということがわかります。

現代になると、もう少し客観的になる。これが現代の成長のシンボルだというものではなく、むしろ形が面白いとかクールだとかかっこいいとか、そういう見方で写真家が作品をどんどん発表しているわけです。それに追従するように、SNS によって一般の人でも撮影して楽しむようになってきています。あるいは、まちの原風景の一つとして考えることもできる。一般大衆（パブリック）もどんどんそれを盛り上げている。例えば、これは富山県入善にある発電所美術館です。もちろんこの景観が面白いということもありますが、廃止された発電所を美術館として再利用するという事業が日本にもあるのです。

ところで、イギリスはこのような産業遺産や産業景観の先進国ですので、私たち日本人としても参照すべきところが多くあります。これは、私が 1997 年に撮影したロンドンのバンクサイド発電所です。1963 年につくられた後廃止され、廃墟となっていました。2000 年からはテート・モダン美術館として使われています。このように、外観は殆ど変わっていません。中に入ると、このよ

うに発電所の大きなスケールの中にモダン
アートの作品が散りばめられている。こう
いう事例を見ると、近代産業、あるいはその
形成する景観に対する強烈な気持ちを持つ
ている国であると感じます。

これからイギリスの産業風景をいくつか
ご覧になっていただければと思います。こ
れはツイードミル。オックスフォードシャ
ーのブリスという町にあった繊維工場です。
工場が廃止された後、マンションになって
います。ここは非常にアクセスが悪くて、最
寄り駅まで約 20km、最寄りの高速道路の
インターチェンジも 10km ぐらい離れてい
ます。車がなければ生活できないような場
所ですが、このマンションはとても人気が
あって、売り出したらすぐに完売してしま
ったそうです。こういうところで生活する
ことに対する憧れのようなものがあるのか
もしれません。

これも、オックスフォードシャーにある
石炭火力発電所です。向こう側に、クーリ
ングタワー（冷却塔）があります。1968 年
に完成したのですが、ジェリコという景観
設計家が携わっていて、見栄えのいいもの
にしようという配慮がされているものです。
極めて人工的なものがそのまま姿を現して
います。地元では、この発電所を愛する人た
ちもかなりいましたが、残念ながら 2010 年
に EU の環境基準にそぐわないということ
で解体されることになりました。私が行っ
たときはまだ解体されていなかったので、
このような風景に出会えました。イギリス
の BBC ニュースのウェブサイトにも、いろ
いろ面白いことが書かれてあります。多く
の市民が早朝から解体現場に立ち会ったの
だそうです。この景観を愛している市民がこ

れほどいたということなのですね。

これはロンドン、最近また再開発が進ん
でいるところです。1929 年に完成したバタ
シー発電所で、長く廃墟として存在してい
ました。今、ここを再開発しようというこ
とで、この景観はそのまま存続されること
になっています。これまで各所でモチーフに
されています。ロンドンの人たちのバタシ
ー発電所に対する思いが、表れ出ているの
かもしれません。例えば、ピンク・フロイド
という一世を風靡したロックバンドの
1977 年のアルバム「アニマル」に、これが
出ています。レコードジャケットのインパ
クト材料として使われている。最近絵は
がきにも出てくる。また、アリソンエッフェ
ンさんというデザイナーによるピアスでも、
モチーフになっています。この産業景観が、
いろいろなモチーフに使われ得るものだ
ということがわかります。

有名な旅行ガイドブック『地球の歩き方』
に、ロンドンシリーズがあります。これま
では衛兵やロンドンブリッジ、バッキンガ
ム宮殿やエリザベス女王などが描かれてい
ましたが、2014 年にはバタシー発電所が描か
れました。いよいよ日本人に対するアピー
ルポイントとしても、この産業景観が使わ
れるようになったのかと感じました。

ところで、私はこれまでテクノスケープ
（産業景観）に関する本を単著で三冊ほど
書いております。これは私が 2003 年に書い
た『テクノスケープ』という本で、テクノス
ケープの概略のようなことを書いています。
これは 2017 年に書いた『日本の砦都』で、
セメント・石灰石鉱業の工業都市がどうい
う景観をもっているのかということをもと
めた本です。幸運にも都市計画学会と観光

研究学会、日本造園学会からも賞をいただいています。その後2018年に出版した『美しい英国の産業景観』は、各新聞社からいろいろ書評をいただきまして、ご好評いただいております。私の目から見た景観を紹介するビジュアル本です。

◆日本の砒都

その中から今日は「日本の砒都」のお話を少ししたいと思います。セメントの主原料である石灰石は、肥料や製鉄などにも使われますが、あまり石灰石を間近に見たということはないという方もおられるかもしれません。石灰石は、日本で唯一自給できる地下資源で、輸出までしています。石灰石を採掘するための鉱山は、北は北海道の上磯から東鹿越、本州では先ほどの八戸、日立、秩父、美濃、赤坂、大垣、伊吹山。この近くですと、今はもう採掘していませんが和歌山の由良があります。それから新見、秋吉台、平尾台。こういったところにたくさん集中しています。沖縄にも大きな石灰石の採掘場があります。沖縄は、琉球石灰岩という言葉があるほど島全体が石灰岩でできている島です。沖縄の観光地をよく観察してみると、実は石灰石由来のものがたくさんあることがわかります。斎場御嶽も首里城の石垣もすべて石灰岩です。

石灰窯で石灰石を焼成して石灰が作られますが、これは江戸時代からやられてきました。その遺構が、産業遺産として各地に点在しています。これは福岡県の香春町、太平洋セメントの工場があったところです。これは愛媛県西予市の明浜、石灰石の採掘地帯になっています。こういう石灰窯の遺構が残っていて、その多くが文化財に登録さ

れています。

石灰石の鉱山のあるまち、あるいはセメント工場のまちを、私は「砒都」と呼んでいます。そこにはどんな景観があるのかを、皆さんと一緒に探してみたいと思います。

石灰石と石灰岩はほぼ同じ意味です。石灰石の地層が特徴的な自然景観を呈することはよくわかっています。例えば、鍾乳洞は石灰岩です。滋賀県にも美しい鍾乳洞がありますし、有名な山口県の秋芳洞、福島のおぶくま洞、沖縄の普天間にも神秘的な鍾乳洞があります。また、石灰岩の切り立った岩や山などがあります。凸形の山ができやすいともいわれています。これは四国カルストという高知県と愛媛県の間にある羊群原ですが、エキゾチックな石灰岩の景観を呈していて観光地になっています。

そのほかに、産業景観、たとえば石灰工場、セメント工場があります。採掘場や輸送施設もあります。人々がそこで生活を始め、そこが一つの都市になります。そうすると、特徴的な民俗、独特の生活空間も現れます。ここがまた面白いところだと思います。ところで最近、文化財の中でも、ものとしての有形文化財だけではなく、地域の慣習か地域の歌ですとか、そういう無形のもの、いわゆる無形文化財という考え方も出てきています。信仰施設や宗教的空間、お祭りなども文化財になる時代です。その意味では石灰石のまち、砒都が特徴的な民俗（無形文化財）をもっているということがよくわかります。

先ほどの福岡県香春町の工場の周りに、こういう集落がぐっと張りつくような景観があります。これは、地元の人にとってはふるさとの風景になるのだと思います。私も

工業都市の出身で、煙突は一つの原風景です。

これは大分県津久見市です。この写真を皆さんに毎回お見せすると、岡田は工場見学に行ってきたんだねとおっしゃいますが、実はそうではなく、これは太平洋セメントの敷地の中を貫通している公道です。この向こう側に徳浦という集落があり、手前に大分県津久見市の中心地があつて、そのアクセス道にもなっています。地元の高校生、あるいは買い物に行くおじちゃんおばちゃんが自転車を通る光景が普通に見えます。津久見市民は、日常的にこの景観を体感している。周りには、津久見市セメント町という行政町名まであります。ちなみに小野田セメント発祥の地である山口県山陽小野田市にもセメント町があります。

子どもたちが釣りで遊ぶところの目の前にも工場が見えたりとか、その工場を背景とした公園があつたりとか、さまざまな産業景観が展開します。それから採掘場。もちろん普段は入れませんが、1年に1回、津久見市ふるさと振興祭が10月に開かれ、開放されます。私も一度参加しましたが、石灰石を運搬する大型のダンプに登ることができたりとか、こういうものにふれることもできる。町としても大いに盛り上がっていると思いました。

これは、北海道の北斗市上磯です。海上に向かっているコンベアがある。一つの「名景」と呼んでもよいでしょう。これは許可を取って海側から撮った写真です。全然違うものにも見えます。上磯を特徴づける一つの風景になっていることがわかります。

石灰石は重量あたりの値段が非常に安いので、効率的な輸送手段が求められる。こう

いう石灰石運搬列車もありました。今はコンベア、あるいはトラック輸送に置き換えられています。残っているところがいくつかあります。これは岩手県大船渡市の岩手開発鉄道という石灰石列車で、絵になるということで地元の写真家がよく撮影されていますし、写真集も出版されています。先ほどの四日市にも、三岐鉄道という石灰石運搬列車があります。今はセメント輸送に変わっていますが、この藤原岳から一気に石灰石あるいはセメントを、四日市の末広橋梁（重要文化財）を通過して港まで運ぶ。いわゆる「三重石灰石の道」と呼びたくなるルートです。これは私が今一生懸命 PR しているものです。

これは私の故郷の茨城県日立市です。石灰石を運搬するゴンドラは、私は子どもの頃からずっと見ておりました。何なのかということをおそらく知らずに育ちましたが、ゴンドラを見ると地元に戻ってきたなという気持ちがいつもしていました。かなり数が減ってしまい、日本で現存しているのはここ日立だけだったのですが、最近ついに廃止されてしまいました。ゴルフ場の上をこれが通るといふ不思議な光景がある。このニュー山根ゴルフクラブはもともとこのセメント会社の福利厚生施設として造られたものですので、よくよく考えてみると同じ会社の同じ所有物なのですね。ある意味これが共存することには、景観としての合理性があるのかもしれない。

先ほど無形民俗の話をししましたが、どのようなものがあるのかを詳しく調べてみました。いろいろな歌が地元にはあることがわかりました。例えば北斗市の『上磯音頭』。「峯朗鉦山の発破が響き合う」と三橋美

智也が歌っています。岡山県の『新見ばやし』は YouTube にも上がっています。「発破の轟 煙が晴れりゃ」という歌詞があります。新潟県糸魚川市も砒都で、デンカの工場があります。『青海小唄』には、デンカ工場の「ポーが鳴る」(サイレンが鳴る)や発破の音といったものが熱く歌われているということがわかります。

埼玉県秩父市の 1925 年に造られた工場は、工場と従業員の住まいと福利厚生施設が一体的に整備されていました。いろいろ調べてみると、秩父セメント(現太平洋セメント)の初代社長である諸井恒平と、日本林学の父といわれる本多静六の 2 人がアイデアを出し合いながらこういうまちをつくっていったという歴史がわかりました。この 2 人は親友で、本多静六は日本に「景観」という概念を立ち上げた巨匠といわれています。地域づくりの観点からも、この砒都に注目してみることに興味深いものがあります。

4 年前に、太平洋セメントの 20 周年記念イベントがありました。そのときにもご紹介しましたが、砒都のお菓子は、まさしく無形文化財といえるものだと思います。意外と人知れず存在しているものでした。これは山陽小野田市の「せめんだる」というお菓子です。つねまつ菓子舗が 1952 年に作り始めたもので、セメントの樽をモチーフにしたものなです。これは、1980 年代から北海道北斗市で売られている「セメンぶくろ」というお菓子で、セメントの袋をそのままモチーフにしています。次にこれは、福岡県飯塚市にあるものですが、もともとは田川市にあった菓子店です。田川はどちらかという石炭のまちというイメージがあります

が、実は石灰石も採れる砒都です。麻生セメントがありますので。そこでは「白ダイヤ」「黒ダイヤ」という羊羹が販売されています。最近では町おこしの一環でこういうご当地グルメをどんどん作る傾向がありますが、この 3 つに関しては 1950 年代に始まっている。わがまちの宝をモチーフとした銘菓です。その意味では、腰の据わった砒都の銘菓ということがいえるのではないかと思います。ちなみに「せめんだる」は、太平洋セメント社で打ち合わせをするときに持つて行くスムーズに行くという逸話も残っております。

このほか、宮沢賢治や三橋美智也、原敬といった著名人たちが、意外にも石灰石の生産に関わったりしています。これは、東北砕石工場という石灰石を粉末化して肥料を作る工場だったところですが、宮沢賢治が技師として働いていたという歴史があります。農業振興のために生涯をかけたエンジニアでもあった宮沢賢治ゆかりの場所でもあります。

◆石灰石と日本

最後に、「石灰石と日本」ということを考えてみたいと思います。『君が代』を改めて振り返ってみたいと思います。歌詞「君が代は 千代に八千代に さざれ石の巖となりて 苔のむすまで」は、何を意味しているのか。天皇、国民の世の中が、長い時代繁栄するという意味ですが、私も疑問に思っていたのは「さざれ石が巖となって苔のむすまで」というところです。さざれ石は細かい石とか小さい石を意味します。小さい石がだんだん成長して巖となって、そしてそれに苔がむすまでという、ものすごく長い年月

を意味しています。その長い年月、国民があるいは天皇陛下が栄えればいいですね、という意味だといわれています。ただ、まじめに考えると、石が成長して岩になるなんてことがあるわけではないのではないか。そもそも国歌に対して科学的な根拠を求めるといって自体がナンセンスなのかもしれませんが、日本の国歌『君が代』の歌詞の意味を研究した先人たちはこれまでもたくさんいたようです。私もいろいろ見てみましたが、諸説ある中で最も有力な説として、さざれ石は実は学名「石灰角礫岩」である、つまり石灰石であるといわれている。石灰石は水に溶けやすく、ペースト状になる。そこにいろいろな石が集まってきて、それが固まると結果的には大きな石になるという考えです。科学的にもさざれ石が巖となることは不可能ではない。さらに調べてみたら、岐阜県揖斐川町に「さざれ石公園」という公園があることがわかりました。かなり山奥に入ったところにあり、巨大なさざれ石が祠とともに展示されています。確かに小さい石が集まって、大きな巖になっています。中曽根元首相による「さざれ石」の文字(揮毫)も刻まれています。岐阜県揖斐川町は、伊吹山から 3.7km しか離れていません。伊吹山は石灰石の山で、西側で石灰石が採掘され、住友大阪セメントが立地してセメントを製造していました。そこから目と鼻の先にある揖斐川町は、地層が同じなので石灰石が存在します。そこにさざれ石公園があることには合理性があると思います。

ここは、もと春日村というところでした。「愛石家」の小林宗一さんという方が、さざれ石の正体を研究されていて、1951年にこれを発見したそうです。1977年に岐阜県が、

このさざれ石を天然記念物に指定しています。小林さんはその後、ここから採れるさざれ石を各所に寄贈したという記述がありました。小林さんが書かれた本(私家版)に、いろいろな寄贈先が記述されています。どれだけ寄贈されたのか。いろいろな所がありました。例えば、出雲大社にも岐阜県揖斐川町から寄贈されたさざれ石が展示されています。このほか、伊勢神宮の外宮と内宮、猿田彦神社、京都の護王神社にもあります。同じ説明が書かれています。三重県は結構多くて、桑名、椿大神社、町役場など、福井の護国神社、大阪の護国神社、明治神宮、鶴岡八幡宮、日枝神社……、挙げていけばきりがありません。私は一昨日まで仕事で文科省に行っていましたが、その中庭にも展示されています。近年では平成 20 年代に岐阜県の会社がさらに寄贈を始めたりとか、今も各地に広がっています。今のところ 46カ所を調査してみましたが、まだほかに 60カ所以上あるようです。石灰石は日本でたくさん採れるというだけではなく、日本人の心の根底に何か深く関わっているのではないかと考えていくと、それが形成した自然景観、あるいは産業景観の意味には、日本人として注目すべき要素が含まれているのではないかと思います。今後もう少し追求してみたいと思っています。

最後に、日本の砦都から何が読み取れるのかをまとめてみました。まず、高度経済成長を支えたもの。「三白景気」という言葉もありましたが、明らかにセメントはその一端を担っていました。高度経済成長の遺産です。もう一つは、石灰石と日本文化です。豊かな地下資源、それから先ほどのさざれ石の観点です。それから、今日は時間がなく

てご紹介できませんでしたが、「アニミズム」の観点もあります。日本では、さまざまなものが神様になりうるわけです。ほかの国ではアジアも含めて、あまり見られないことです。山も川も水も石も神様になるわけです。神様となっている山が石灰石の山であるという事例もあります。滋賀県の伊吹山もそうでしたし、埼玉県秩父市の武甲山もそうです。信仰の山を削って生産活動をして、まちは潤うという、ある意味ジレンマのようなものもあったわけです。それでも日本人はこのジレンマと共存してきた。これは尊い歴史であると思います。

新しい観光対象として、自然観光だけではなくて産業観光を組み合わせるということをいろいろな学者が言われていますが、砒都はその典型ではないかと思っています。豊かな砒都の文化と地域の誇り、アイデンティティーが市民の間で共有されると、わがまちをもっとよくしていこう、いいまちにしていこうという一つの強いモチベーションになります。その意味でも、地域のアイデンティティーの一つとして、砒都の産業景観、あるいは自然景観を考えていくことが重要になると思います。最近では石炭産業に関してこのような取り組みが始まっていますが、そろそろ石灰石に関しても関心が高まっていくのではないかと期待しています。いろいろアイデアを出し合いながら皆さんと一緒に考えていければと思っています。

ご清聴どうもありがとうございました。